

かたき討雑感

岡本綺堂

青空文庫



わが国古来のいわゆる「かたき討うち」とか、「仇討あだうち」とかいうものは、勿論それが復讐ふくしゆうを意味するのではあるが、単に復讐の目的を達したただけでは、かたき討とも仇討とも認められない。その手段として我が手ずから相手を殺さなければならぬ。他人の手をかりて相手をほろぼし、あるいは他の手段を以て相手を破滅させたのでは、完全なるかたき討や仇討とはいわれない。真向正面から相手を屠ほふらずして、他の手段方法によつて相手をほろぼすものは寧ろ卑怯むしとして卑いやしめられるのである。

これは我が国こくふう風でもあり、第一には武士道の感化でもあろうが、それだけに我がかたき討なるものが甚だ単調になるのは已やむを得ない。なにしろ復讐ひの手段がただ一つしかないとなれば、それが単調となり、惹ひいて平凡浅薄となるのも自然の結果である。我がかたき討に深刻味を欠くのはそれがためであろう。かたき討といえ、どこかで相手をさがし出して、なんでも構わずに叩つ斬つてしまえばいい。ただそれだけのことが眼目では、今日の人間の興味を惹きそうもないように思われるので、わたしは今まで仇討の芝居というものを書いたことがなかった。

この頃、この『歌舞伎』の誌上で拝見すると、木村錦花氏は大いにこのかたき討について研究していられるらしい。どうか在来

の単調を破るような新しい題材を発見されることを望むのである。



わが国のかたき討なるものは、いつの代よから始まったか判らな
 いらしい。普通は曾我兄弟の仇討を以て記録にあらわれたる始め
 としているようであるが、もしかの曾我兄弟を以てかたき討の元
 祖とするならば、寧ろむし工藤くどうすけつね祐経を以てその元祖としなければな
 るまい。工藤は親のかたきを討つつもりで、伊東いとうすけちか祐親の父子を
 射させたのである。祐親を射損じて、せがれの祐すけやす安だけを射殺
 したというのが、そもそも曾我兄弟仇討の発端であるから、十郎

五郎の兄弟よりも工藤の方が先手であるという理窟にもなる。

それからまた、ぶんじ文治五年九月に奥州のやすひら泰衡がほろびると、そ

の翌年、すなわち建久元年の二月に、泰衡の遺臣おおかわじろうしげと大河次郎重

任う（あるいは兼任かねとうという）が兵を出羽でわに挙げた。その宣言に、

むかしから子が親のかたきを討つたのはある、しかも家来が主君の仇あだを報いたのではない。そこで、おれが初めて主君のかたき討をするのであるといっている。勿論かれは奥州の田舎侍で、世間のことを何にも知らず、勝手の熱を吹いているのであるが、建久元年といえば曾我兄弟の復讐以前——曾我の復讐は建久四年——である。その当時の彼が昔から親のかたきを討つた者はあると公言しているのを見ると、曾我兄弟以前にもその種のかたき討はいく

らもあつたらしい。家来のかたき討も大河次郎が始めではない。

いづれにしても、昔のかたき討は一種の暗殺か、あるいは吊とむら

合いがっせん戦せんといったようなもので、それがいわゆる「かたき討」の

形式となつて現れて来たのは、元龜げんき天てん正しょう以後のことであるら

しい。殊ことに徳川時代に入いつていよいよ盛さかんになつたのは誰たれも知る通

りである。しかもそれが最も行われたのは享きやう保ほう以前のこと

その後はかたき討もよほど衰えた。

幕府の方針として、かたき討を公然禁止したわけではないが、

決して奨励してはいなかつた。なるべくは私闘を止めさせたいの

が幕府の趣意であつた。しかも已すでにかたき討をしてしまった者に

対しては別とがに咎めるようなこともなかつたから、やはりかたき討

は絶えなかつたのである。



幕府直轄の土地には殆ど^{ほとんど}その例を聞かないようであるが、藩地ではかたき討の願書を差出して許可されたのもあるらしい。それについて毎々議論の出ることは、ここに一定の場所を定め、竹矢来などを結いまわして仇討の勝負をさせる。その場合にかたきの方が勝つたらばどうなるかということである。已にかたき討を許可した以上、一方が返り討にされては困る。どうしても仇の方を負けさせなければならぬ。

それがために、その前夜はかたきの方を眠らせないとか、あるいは水みず盃さかずきに毒を入れて飲ませるとか、種々の臆説を伝える者もあるが、そんなことはしなかつたに相違ない。万一かたきが勝つた場合には、その藩中で腕におぼえのある者が武士は相身互い、義によつて助力するとかいつて斬つて来る。首尾よくそれを斬伏せたとところで、入れ代つて二番手三番手が撃ち込んで来れば、結局疲れて仆たおれるにきまつている。こんなわけで、已にかたきという名を付けられた以上、たとい相手をかえり討にしても、生きて還されないことになっているらしい。

しかし芝居や講談にあるような、竹矢来結いまわしのかたき討などは実際めつたになかつたであろう。幕末になつては、幕臣は

勿論、各藩士といえども、かたき討のために暇いとまを願うということ
は許されなかつた。わたしの父の知人で、虎の門の内藤家の屋敷
にいる者が朋輩ほうばいのために兄を討たれた。かたきはすぐに逐電ちくでん
したので、その弟からかたき討のねがいを差出したが、やはり許
可されなかつた。ただし兄の遺骨をたずさえて帰国することを許
された。内藤家の藩地は日向の延岡であるが、その帰国の途中、
高野山その他の仏寺を遍歴参拝することは苦しからずということ
であつた。要するに仏事参拝にかこつけて、かたきのゆくえ搜索
を黙許されたもので、それは非常の恩典であると伝えられたそう
である。それとても江戸から九州までの道筋に限られていること
で、全然方角ちがいの水戸や仙台へは足を向けられないわけであ

った。果してそのかたきは知れずに終った。



錦花氏のいわれた通り、亀山の仇討は元禄曾我と唄われながらもその割に榮^はえないのは、石井兄弟のために少しく気の毒でもある。しかもそういう意味の幸不幸は他にいくらかもある。現に浄瑠璃坂の仇討のごときは、それが江戸の出来事でもあり、多人数が党を組んでの討入りでもあり、現に大石内蔵助の吉良家討入りは浄瑠璃坂の討入りを参考にしたのであると伝えられている位であるが、どうもそれがぱつとしない。事件が京阪に關係がないので、

浄瑠璃坂も浄瑠璃に唄われず、人形にも仕組まれず、闇から闇へ葬られた形になつてしまつた。よし原の秋篠なども芝居になりそ
うでならない。もつとも「女郎花おみなえしゆかりのすけだち由縁助刀」という丸まるほん本に
はなつてゐるが、芝居や講談の方には採用されず、したがつてあ
まりに知られていないらしい。

なんといつても、かたき討は大石内蔵助と荒木又右衛門に株を
取られてしまつたので、今更どんな掘出し物をしても彼らを凌ぐ
ことはむずかしい。大石には芸州の浅野が附いてゐる、荒木には
備前の池田が附いてゐる。かういふ大おおだ大名いみようのうしろ楯だてを持つ
てゐる彼らのかたき討よりも、無名の匹夫匹婦ひつぷひつぷのかたき討には幾
層くそうばい倍かんなんしんくの艱難辛苦が伴つてゐることと察しられるが、舞台の小

さいものは伝わらない。勿論、かれらは名のために仇討をしたのではあるまいが、第三者から見れば何だか気の毒のようにも感じられるのが沢山ある。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「歌舞伎 臨時増刊号」

1925（大正14）年9月

初出：「歌舞伎 臨時増刊号」

1925（大正14）年9月

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

かたき討雑感

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>